
青い剣（ブルーソード）

大志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

青い剣

フルソード

【Nコード】

N0704U

【作者名】

大志

【あらすじ】

ハイド・ローフンは、カランの森へ迷い込み、そこで、青く光る物……青い剣^{フルソード}、ホーリドを発見する。ホーリドは、この世界が平和ではないと言い出した。その詳細は不明だが、ハイドは素質を買われ選ばれし者に……。そして、3つの契約、勇気・冷静・判断を守り、世界の平和を取り戻すファンタジー。

旅立ち編 第一章 一話 大騒ぎ

空は雲一つなく、青一色で染まっていた。川は濁りがなく、まるで透明のような水が流れ、魚がよく見える。森は、鳥が棲みつき、親鳥が小鳥達のために取ってきた餌を与えていた。他にも、鹿や猪、狼などが、この森で生息している。

自然に恵まれたこの世界は、まさに平和だった。その自然に囲まれた一つの町がある。カリフというごく一般的な庶民が住んでいる。中心に天使と天使が戯れているような形をした噴水があり、その周りで子供二人が木製で作られた剣を使って遊んでいる。学校は、カリブ学校がある。ここの学校は、十五歳からしか入れない。基礎教育は親が教えることになっている。コースは、男性は兵士コース、女性は治療コースである。前者は、兵士としての技術を学び、後者は、治療をするための技術を学ぶ。詳しい内容は言えないが、三年間授業を受け、卒業する。その他、野菜や肉、魚などが売っている食品屋や、いろいろな薬が置いてある薬屋などがある。

さて、そんなカリブの町から離れた一軒の家がある。木で作られ、一つの窓がある。一階建てだが決して狭くはない。煙突からは煙が出ている。この家の周りは、草原のみで、優しい風によって草が摩く。家から数百メートル離れたところに、一人の青年が草原の中、腕を頭に乘せながら心地よく寝ている。この青年の名は、ハイド・ローフンである。整った青い髪と、端正な顔立ちをし、目立った脂肪がなさそうな体型をした十六歳だ。今日は安息日のため、寝ているのである。優しい風によって、彼の髪、眉、服などが草原と一緒に靡いている。すると、ある一人の緑色のセミロングの女性が現れ、彼の前で止まり、

「ハイド、起きて」

大声で言ったのにも関わらず、平然と寝ているハイド。

「起きなさい！ 起きなさいってば」

しかし起きない。

「早く起きないと、ハイドのお腹、両足で踏みつけてやるから」

これでも起きないため、ついに我慢の限界。彼女の火山が噴火し、すべての力を出し切って跳躍、彼女の全体重をかけた両足が、一秒も経たない内に、彼のお腹に命中した。さすがにハイドも起きて、

「ゲホ、ゲッホ」

お腹を両手で押さえながら、咽まくる。

「ゲッホゲッホゲッホゲッホゲッホゲッホホホホ」

強烈だったのか、独特な咽方をするハイド。それを見て誇らしげに腕を組み、堂々としている彼女。それを見た彼は、咽ながらも彼女に近づいた。

「エンリー、ゲホ、今日はゲホ、安息日だからゲホ、寝ていたというのにゲホ、起こすならゲホ、普通に起こせよ、ゲホ」

「咽ていて何をいつているのかわからないわ」

彼女の名は、エンリー・クラリアス。美しい緑色のセミロングと、眉は細くて長い。笑顔を見せれば愛嬌のある笑窪が印象に残る。

「つまりは、普通に起こせって事だよ」

「普通に起こしましたよ？ でも起きないもん」

「だからといって、両足で俺のお腹を踏みつけるのはやり過ぎにも程があるだろ」

「こうじゃなきゃ起きないと思って」

「もっと他に起こす方法があったらどう？ 例えば、体を揺らして起こすとかさ」

「何も変わらないわよ」

「お前女だろ？ 優しくできないのか」

「女に、優しさとかだけ求めちゃだーめ。それじゃー辛い辛い」

「あー、腹が立ってきた。今度はお前が受ける番だ。覚悟しろ！」

できるもんならやってみなさいよとエンリーが言った直後に、走り出して逃げだした。怒り心頭のハイド、全力疾走は当たり前。
(何せ相手は女だ。すぐにバテるに違いない)

余裕綽々の彼はかなりの自信があった。しかしなかなか追いつけない。寧ろ突き放されている。何故なら彼女は男顔負けの俊足を誇っているからだ。草原には障害などはなく、順調にハイドの差を広げてゆく彼女。

「何でそんなに逃げ足が速いんだよ」

「女を馬鹿にしているからよ。本当、男は馬鹿なんだから」

「んー、なめるなよ。男の怖さを」

彼は限界まで加速し始めた。その途端、差が縮まり始めた。

「もう追いつくぞ。遊びは終わりだ」

「くっ」

体力が限界に近くなってきたエンリーは、近くにあった一つ岩に隠れた。ハイドは岩の前で立ち止まり、

「ははははは、ついに追いついたぞ。もう覚悟はできてるか？」

「誰があんたに覚悟しなくちゃいけないのよ」

「本当、可愛くないな」

ゆっくりと歩き、隠れているエンリーの元に近づいて行って、

「とりゃああああああああああああああああああああああ」

岩の上を跳び越え、彼女に迫っていった。その正面に彼女が見えて、一回転して着地した。

「もういい加減ギブアップした方が身のため……………！？」

すると突然、地面が崩れ始め落下。土煙が暫く舞った。

「何でこんなところに落とし穴があるんだよ」

「知りたい？」

落とし穴の上からエンリーが顔を出した。

「あなたはよく横に回ることがないから、岩の後ろに落とし穴を仕掛けたの。予想が当たったわ」

侮蔑するように笑う彼女を見て、ハイドは落とし穴から手足を使

い素早く這い上がって、彼女の顔まで近づき、

「ふざけるな！ こんなもん仕掛けあがって、今日という今日は許さん。お前を袋叩きにしてやるわ」

「本当はできないくせに……」

「俺は女なんか簡単に殴ることができる。容赦もしねえ」

堪忍袋の緒が無くなるほど怒りが爆発していた。

「うりゃああああああああああああ」

右手の怒り拳が、エンリーの顔に近づく。しかし彼女は奇声一つ上げはしなかった。拳は数センチまで到達した瞬間、そこで止まった……というよりは誰かがハイドの手首を掴んでいる。その異変に逸早く気づき、

「誰だ俺の手首を……」

その顔を見て、ハイドは凍りついた。

「な……なんで……いるの？」

「可愛い女をいじめるなんて……、酷いじゃねえか無礼者！」

「ぎゃああああああああああああああああああああああああ」

その叫び声は、カリフにまで響き渡った。

彼の名は、ブライド・ローフン。ハイドの父親だ。髪はなく、ひげを蓄え、鋼のような肉体が、ピチピチの服に表れている。

ローフンの家で、三人がテーブルに座っていた。綺麗に片付いているキッチン、二つのシングルベット、暖炉上にはハイドとブライドの写真が飾ってある。

「さっきの件に関しては、ハイドとエンリー、お互い悪いな」

「ちよつと待ってよ！ あれだけエンリーに足を踏みつけられて、さらには落とし穴に落とされてそれはないだろ」

「口は災いの元だ。ハイドも悪い」

「エンリーも悪いこと言ってたじゃないか。こんなあんまりだ」

納得のいかないハイド。

「そんなにいちやもんを言うなら。私に勝ってからいいなさい」

（んんん。エンリー 鼻屑親父め）

「そうだハイド。本当はエンリーが起こして言うはずだったが、カリフ学校で実践方式で一対一で剣を持って戦う、アマチュア式の授業を受けるんだっただな。これでいい実績を修めないと卒業できないから、遠くのカランの森へ行って修行しないか？」

そのアマチュア方式とは、剣ではなく木刀で戦い、相手が仰け反り、その木刀を相手に近づけたら勝ちというルールだ。他にもミドル方式やプロフェッショナル方式もある。

「嫌だよ。筆記は順調だけど、実践は全く歯が立たないよ。練習したって無駄」

「諦めるからいつまでたっても成長しないんだよ」

「成長しなくても、自分らしく最後まで生ければ問題ありません」

「私、その修行したくない」

エンリーが席を立ち元気よく挙手した。ブライドは感銘を受け、彼女に握手をしながら上下に揺らす。

「さすがエンリー、好奇心が旺盛だね。ほら、彼女が修行したいと言っているぞ。断ったら恥ずかしいぞ？」

ブライドはハイドの顔に近づいて、にやけながら言った。

「それでも断る。例えば男でも女でも別に恥ずかしくも何にもないから断る」

「じゃあこれ、読んでもいいのね？」

「!？」

彼女が手に持っているのは……、ハイドの日記だった。

「待て、それ返せ。ていうか、鍵かかってただる俺の机」

「ちよつといじつたの。案外簡単だったわ」

「絶対読むな。死んでも読むな。読んだらしばくぞ」

慌てるハイド。その背後からブライドが、彼の両脇を抑える。

「構わん。読んでくれ」

旅立ち編 第一章 一話 大騒ぎ（後書き）

こんにちは、大志です。ここで小説を書くには一年ぶりです。今までいろいろ書いてきましたが、ことごとく諦めたりしてききました。

しかし今回は、最後までやり遂げたいです。

今回の作品は、シンプルな作品です。

技術の向上のため、コメントを書く際、この小説を指摘してください。

私にとって、みなさんの指摘が力になります。

大学生活と部活があるため、最悪不定期になることがあります。できるだけ少なくして、早く更新したいです。

これからもよろしく願います。

P・S

小説家目指しています。

二話 修行

翌朝、太陽の光が木々でほぼ覆われ、あまり日が入ってこないカランの森で、ハイドは両手で木の剣を握り、ブライドは右手でハンドと同じ剣を握り、左手は突き出し対立していた。

二人は静止を保ったまま、動こうとはしない。その片隅で、エンリーが岩に背を預け座り込んでおり、側には勿論木の剣である。

じつと見つめたまま、時が過ぎていく。ついには風が吹いて髪や服が靡く。太陽の光を浴び続けているのか、汗が出ている。そのお互いの汗が、顎の下に落ちた時、

「……？」

とっさにお互いが動き出しだした。

「うりゃあああああ」

先にハイドはジャンプをし剣を大きく振りかぶり、勢いよく下ろす。簡単に制止され、しなやかに宙返りをし着地。

「この攻撃じゃ勝てないよ。もっと細かいところを攻めないと勝機が見えてこないぞ」

「これが俺の戦い方だ」

彼の剣術に関しては、豪快である。つまり、一撃で決めるタイプ。徐々（じょじょ）にダメージを与えることが頭にならないのだ。

「次はこっちから行くよ」

ブライドが近づき、ハイドの腰の辺りをついた。いやらしい攻撃に、右へ左に捻り、順調に避けていく。その隙に剣を横にして、ハイドの足に当てた。体制を崩し、仰向けになって倒れた。

「くっ……」

悔しさを顔で表し、立ち上がるうとするが……、彼の首のところには、剣の先がおよそ数ミリまで近づいていた。

「もっと粘れ、早すぎる。よけている間に次の攻撃のことを考えないと、相手が次の攻撃に移る。」

「俺はこういうスタイルなんだ。変えるつもりはさらさらない」

「そんなガムシヤラなスタイルに拘こたわってちゃ、敵に勝てるはずがないだろ。はあー」

ため息をつくブライド。その横でエンリーが準備体操して、手首を回して、足首も回しながらブライドに言った。

「ハイドは交代、次は私の番。ブライドさん、お手柔らかに」

「よし、確か初めてやるのだったな。手加減はするが、その代わりに全力で戦ってもらうぞ」

「わかりました。全力で望みます」

真剣な眼差しでエンリーは頷うなづいた。戦いの準備ができ、お互いが定位置についてその後、冷静になる。無言が続いているが、風の音だけが残る。大きな木に一片ひとひたの葉っぱが落ち、右に行ったり左に行ったりしている。それが地面についた瞬間、お互いが動き出す。エンリーは一度止まり、ブライドの様子を見た。剣を振り下ろす彼を見て、タイミングよく鮮あまやかに避け、まるで妖精まじのような綺麗きれいな着地をし、ブライドが剣を上げ直しているうちに、背後に回り込み、袈裟けさ切りを試みる。だが、紙一重であっさり避けられる。

「なかなかやるじゃないか。柔軟じょうなんな考えな上に、隙すきを突いて攻撃することは、素人にしては賞賛しょうさんに値あたするぞ」

「ありがとうございます」

「ベタ褒めは度が過ぎてているな、相変わらず」

岩にもたれかかって座まっていたハイドが、僻ひがみがらみに言った。

次はエンリーが真正面から攻せめていった。そこからフェイントをかけ、横に回り込み剣を振り下ろす。ブライドは剣を水平にし、制止せいしを図った。すぐに離はなし、エンリーは足に狙ねらいを定め、横切りを図る。それにジャンプをして回避する。

「もらった!」

瞬時しゅんじに剣を構くまえなおし、豪快ごうがいに下ろす。絶体絶命ぜつたいぜつめいのブライド。だが、剣を早く左に動かし、持ち前の技術で危あやうく止めることができた。勢いきいよく振り下ろした剣の反動で、二人は突き飛ばされ、かな

りの距離を取った。

「こんなに劣勢に立たされるとは思いもしなかったよ。手加減しなくてもいい勝負ができるね。」

「実はもうこれが精一杯なんです。ブライドさんの剣術には敵いません」

「いやいや、さらに修行に打ち込めば、私と対等に戦えるまでに成長できるぞ」

「ありがとうございます……」

「ああああああ、川に行って水飲んでくる」

ハイドは髪を両手でぐしゃぐしゃにしてから、疾風のごとく走っていった。

「怒ってるのかな？ ハイド」

「放っておけ、いつもの事だ。他人の強さを見ていると羨ましくなってしまうから……」

「結構、嫉妬深いんだ」

「さーてまだ終わってはいないぞ。戦闘再開だ」

「はい」

エンリーは元気よく頷き、再び戦いを始めた。

透明の水が流れている川の辺で、ハイドが両手で水を掬って、顔を激しく洗い始め、突然叫び始めた。

「くそおお、何で俺は強くなれないんだよおお」

さらに顔を洗う。2回、3回、4回、5回と。落ち着いたのか、服で顔を拭いて、暫く蹲る。

何故強くなれない。その原因は何か？

それは力なのか？

しかし力だけでは勝つことはできない。

ならば技術なのか？

二話 修行（後書き）

どうも、大志です。

まさか一週間以内に書き上げられるとは思いませんでした（笑）成長したのかな？ でもまだまだですね。油断は禁物。

ここから日常に移ります。

やっぱり気になるな、定期テスト。一週間後はその説明会があるわけです。なんとしてでもすべての単位をとりたいのです。そうじゃないと安心してバイトにもいきけません。まだまだ安心できない大学一年生の夏。慣れてはきたが完全ではない。

部活のソフトボールの方は、守備は主に内野をやっています。お粗末すぎてグラブでボールを捕らず、素手でとることが目立っています。い、かなりの重症です……。いつになったら堅実な守備ができるのやら。でももう、練習や先輩たちのアドバイスで切り抜けるしかないです。

次回の更新日は、良い時は7月上旬、悪いときは7月下旬になるかもしれません。理由は、宿題が残っているので、いつそのこと片付けたいからです。

波があると思いますが、これからも私の小説を読んでもらえれば幸いです。

最後に、必ずしも感想を書くときは、指摘をお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0704u/>

青い剣（ブルーソード）

2011年6月22日20時40分発行